

短歌随筆・エッセイ論文集

武本由夫著作抄

BIBLIOTECA
DA
SOCIEDADE BRASILEIRA
DE CULTURA JAPONESA

短歌作品のみを収録

短歌随筆・エッセイ論説

武本由夫著作抄

我が立てる巖に砕くる潮のむたしぶきとなりて天にきら
へり

夕づく日照り沁む丘のなだりへに花を乏しみ咲ける木苺
匂やかな枝かいくぐり色づきし山椒の粒を掌にこき入る
る

銭撲ちてゑらぐ子ら見つつこの国の趨（おもむ）かむ
末に想めぐらす

論争の余憤に耐へて帰り来し吾が顔色は妻の言ふべし

夕かげは幹にはだらに黄に映へて下行く私の心寄らしむ

まだかたき実いくつ空に高々とかけて寂けき木棉の並木

露こぼす並木のかげに列なしてバス待つ人の咳さむし

雲一朵雨を落として過ぎゆけば濡れし穂草のしばしかが
やく

子を連れて口笛吹きゆく風の中川原茅花の光眼にしむ

夕光の露台の手摺に依る久し胸にひびきしクルイーラ鳴
く

転生を希はむ言葉想へればサビアの声さへ口説の如し

ベンテビーの声捉へ聴く幾秒か身内にさびしき翳がゆら
めく

くれぐれの池に微光は反りつつポツカリとしてコツポ・
デ・レイテ

佇ちつくす闇の桃畑虫の音は波動となりて胸ぬちにあり

グワラウーの山鼻海に突き出でてそこに怒れる濤のとど
ろき

濱遠く無尽に乱れし足の跡夕べは満ちて波の消すべし

心して聞けば階行く足音さへありありと人間の個性を示
す

山深く巡り入り来し林道の陽当る所白気に立ちつつ

風にそよぐ鈴懸若葉見て立てりその我が面を人見て立て
り

黄檗 (おうばくーきはだ) の風吹きて波紫の河口に荒き夕
日きらめく

うなじ垂れて聖典黙読の後姿は朝の渚のウルブルー三羽

沖遠く一つ船泊て耀きて瞬の間しるき朝あかね雲

砂かつぎて舳先のみ見ゆ船み霊浜昼顔の花鎮まれる

黄昏の町はづれなる廃園になき臭き猫のまなこの光

酒に耽りて目尻渋きあかときの窓にさやけき寺鐘のひびき

借銭を負ひて苦にしてゐることもありやうは物質軽視の
むくい

銭金を記して惨めになり来れば古書の幾冊夜々読み更か
す

得る科(しろ)の乏しき邦語の教師なりき髪に白きが混り
てなほも

かかづらふ事みな金銭に縁薄くつつましやかなる私の明
けくれ

明鳥は軒端の若木に囀れど命死したる人の静けし

往還のゆきつくるところ荒浪の波の秀立ちは雄雄しろか
も

花を作る愉しきは知らね秋たてば庭の黄菊に心寄りゆく

わが眠る蚊帳に螿螂ひとつめてこちたきまでも鳴きすま
しをり

処世つたなき我にてもあるか行末には富み栄えむことの
無しと言はねど

子等病めば裏庭を踏む者もなく散り敷く梨花のただにし
白し

片っぱしから電車の窓硝子砕きをりかうもり傘を逆手に
持ちて

朝より風吹き通す窓にしてゆるみし硝子の鳴る音織(ほ
そし

我が性の教師に適せずと思ふとき授業少しく億劫となり

木苺の花咲く丘の夕まぐれ坂道くだる霊柩車見ゆ

うすら陽の照りて風行く池の上はちすはなべて葉茎短し

砂丘より一条注ぐ真清水を求めて蟹が潮くぐり来る

沈みゆく霧の彼方に連なれるミナスの山やいやはるかな
る

おぼろなる想ひ影絵となりて頭つ蒼きイタペチの峰を仰
げば

微光射す部屋に対座の時移る黙せしままの中江とわれと
ものぐさく夜半の厨に水飲みり酔ひたる我とはらめる猫
と

帰り来し夜更けの床に病む妻が櫛の目掘りつつ黙してゐ
たり

我に似て神経弱くすぐに泣く吾子の行為はみな腹立たし
夕ぐれの空の穏しさうつうつとヂンタの遠音に我が感興
す

嘗て我合力を乞ひし事ある故に出放題をも堪へて言はし
む

今さし迫って欲しきは無けれ言ふとなれば数へて即座に
五指に余れり

二夜寝て今朝発つ友が靴紐を結ぶとき金の無心す口ごも
りながら

壁に向ひ口少しあけて妻は眠りをりまだ片付かぬ荷物の
中にて

(転居)

ことごとく部屋に電燈ともししが又落着かずして巷に出
づる

一つの窓夜となりたれど病む妻の辺に黙然と我が坐せる
まま

段落なき議論に又妻と夜更かせばペン持ちしまま子が来
て厨をのぞく

自意識の混濁に或は馴るる時我もまた傲然として財を言
はむか

朝市にて会ひたる友の言ひ出でし「明朗貧」もなほ惨めに
て

傘除けし机燈のもとカーマに編む妻と物書く我と黙せり
貫ひ来し仔犬の下痢は厭へども啼けば真夜さへ起きて見
に行く

雑誌附録の組立てものにふける子よこの子叱りしもはる
かな記憶

読み疲れ頬杖つけば壁間の師の写真と等しき姿勢

子にかかはる千々の想を聴き更けて虚空に風の音寒から
ず

頼まれし修繕忘れて居りしかばアイロンにがみがみと妻
の当れる

おのづから灯消し戸じまりの役となる夜ふかしは我が芸
の内にて

土産店の片隅暗く居疎みて人を拒めりひびある壺は

ゆく夏の日々に食らふはいはけなき頃より好みし茄子
のもみづけ

寝苦しき夜窓を開けば胸伏せて眠れる妻を月は照らせり

夜の卓に懐中のものみな取り出せばそのまま寂けき孤独
はかへる

密航の息にほはせて終発のフェリーボートに潜む人影

海人護りて山鼻に佇つイエス像仰げばひるむ不信のまな
こ

おぼろ夜の記憶の如く庭に咲くアガパンサスの紫くらし

血縁のあはれを言ひてクワレズマ花散る道に別れ来にけ
り

孔雀椰子の垂れ葉そよぐとあらぬ夜祈りの鐘の余韻は長し

癒ゆるとは思はぬ宵々妻の背に灸すゑて独りの情やりとす

未熟なる思惟もてあまし佇つ畑にエスピナフレの青きひろがり

墓所出でてバス待ちみるに疲れたる色の夕映え塀にむなしき

墓処より見おろす野地に鎮まれる寺棟は低し薄もやの中

下町の拡がるはたて工場の煙あはあは直ぐ立ち消ゆる

孤独なりし友の死思ふ夕日照る高圧線の鉄塔のもと

ラヂオの音低く聴きつつ朝々をサーラに座して物編む妻
は

海よりの風濃密に塗り込めてラーボ・デ・ガツトの朱房が
ゆるる

水皺寄る岸の浮草花つらね夕べは憩ふかりそめながら

病床にふと思ひ出づ電光のごと腰部を性欲走りし去年の
今頃

瀕死の床にてソーロ打ちつつ作歌するこの業病の火消ゆ
る日は何時

インフレが追ひあげ急ぐ形とも高層ビルは建ちあがりゆ
く

大根（おおね）煎じて飲んで命をやしなへと植えてたびた
る白花桔梗

花垂れしプリマヴェーラの夕陰に白猫（はくびょう）坐せり
縹渺（ひょうびょう）として

鍼灸師は脛（はぎ）一点のつぼを抑してまなこ瞑れり祈る
形に

同棟の女の饒舌はてしなし下水修理の分担金議論の

雨にけふる遠山脈を見はるかし散尿の愉しさ地に沁みて
ゆく

ここ幾日生死の間をさまよへる友の面輪が枕辺去らず

わが血継ぐがまた一人ふえしを電話せる妻の声あり感動
こめて

生き死にの境に立ちしこと三度復り来たれり隻脚ながら

ジャカラランダ頻散る樹下徘徊（もとお）りて職失ひし友と
別るる

うなされて醒むるに似たる朝なさをコンクリート攪拌の
音のひびきに

仰向けに足撥ねて舗道に倒れたる瞬間背骨に悔恨にじむ
打ちまろび反射の形に起きんとす雨傘を手にさしあげし
まま

背と腰の痛みに耐へて眠るべしさても執劫なるこの打撲
傷

草枕露けき丘に莫菴敷きて裸形をさらし朝の陽を浴ぶ

煌めきて編隊飛行の夏蜻蛉裸形さらせるわれ擦れ擦れに

還りたる念ひを言へり祖（おや）の国はじめて訪ひし三世
汝が

日向（ひうが）まず咲きて日に日に花展く眼交近くに立て
る木棉は

ひと節の背骨の壊へのそのわけをただす予定の明日入院
日

奥津城に独り額づき焚く香の煙乱して低き風吹く

胸を攻むるコルセットの中にくぐまりて墓は観念の目を
閉じしまま

ペン持てる手を窓にかけ終バスの尾灯が坂道越すまでを
見る

風騒（かざさい）に唄こもらせて老生の寄りて見あぐる
梢あかるし

水音は谷底にありひと株の沼百合木の間
に白らじら匂ふ

日暮より停電ながく蠟の灯に手もとあはあはもの書き疲
る

風寒き海橋をゆく霊枢車ひとすじ夕べの光残して

短歌 隨筆・エッセイ 論説
武本由夫著作抄

発行日 2003年2月
発行者 椰子樹社
ブラジル日系文学会
編集者 安良田 済
印 字 武井和幸
印刷・製本 パウロス美術印刷会社(有)
Rua São Joaquim, 158/162. Liberdade.
CEP:01508-000. São Paulo. SP.